ここからはじまる

石子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ここからはじまる

【Ｎコード】
Ｎ５３０４Ｅ

【作者名】
石子

【あらすじ】
偶然少し話したことがあるだけの先輩のことがずっと気になる私。告白を、することにした。

夕日が差し込み、オレンジ色に染まった渡り廊下。
放課後で人はおらず、吹奏楽部が練習しているのであろう楽器の音が遠くから途切れ途切れに聞こえてくる。
よしっ。
シチュエーションはばっちりだ。
私は、もう一度自分に気合いを入れた。
手の平にかいた汗が緊張を伝えてくる。その汗をスカートでぐいっと拭いてから、渡り廊下の向こう側を見つめる。
いつも通りならば、あの人はそろそろここを通るはずだ。
告白。
……なんて、正直私のガラじゃないと思う。
ほとんどしゃべったことのない先輩のことがこんなに気になるなんて、予想外。そのせいでこんな緊張を強いられているのも不本意この上ないんだけれど。

高野(たかの)先輩と話をしたのは偶然だった。もう半年以上前の事になる。
その日、日直だった私は日誌を書くのに手間取ったうえ、先生と無駄話をしていたのでいつもより帰りが遅くなった。帰宅部なのでみんながクラブ活動をしているのを横目に見ながら帰る事になる。
私が靴を履き替えている時に、目の前の下駄箱の向こう側からガッシャンという大きな音と、「うわっ」という声が聞こえてきたので、気になって下駄箱を回り込んで様子をうかがってみた。
そこにいたのが高野先輩だった。
どうやら、持っていたビニル袋の底が破れて中に入っていた十数本の缶ジュースが床に散らばってしまったらしい。
声をかけようか一瞬迷った。

もちろん普通ならば「大丈夫ですか」なんて言いながら、拾うのを一緒に手伝えばいいだけの話だ。
ただ、高野先輩といえばサッカー部のエースで顔も良くて背も高くて成績も良くて先生の覚えもめでたく友人も多くて女の子にものすごくモテて……という情報が思い出され、気後れしたのだ。
……が、ふとこちらを見た高野先輩と目が合った。
無視して立ち去るわけにもいかない。
「あの。拾うの手伝います」
瞬時に目を逸らすと、私はしゃがんでジュースを拾いはじめる。
「ああ。悪いね。急に袋やぶれちゃってさぁ」
おどけた口調で言う高野先輩。なんか、話し方だけでも人気があるのがうなづけるなぁ、なんて思いはじめたらますます顔を上げられなくなった。
破れたところを無理やり結んで応急処置をした袋の中に、再びジュースを戻していく。
「一年生だよね？　今帰り？」
無言のままでは悪いとでも思ったのか、そんな風に話し掛けられた。制服のスカーフの色で学年はすぐにわかる。
「はい。そうです」
自分でも予想以上にぶっきらぼうな口調になってしまった。悔しいが緊張している。だって、相手はちょっとした有名人だし。
「そっか。クラブとか入ってないんだ？」
私ってばクラブにも入っていないなんて、なんてつまらない人間なんだろう！？　なんでもいいからクラブに入ってれば、ここで少しは話も盛り上がるだろうに！
「入ってません。家のこととか忙しいんで」
……嘘ではないが、もうちょっと言い方あるでしょ、私！
心の中で大パニックだ。
でも高野先輩は、失礼とも言えるくらいの素っ気無い私の言葉を特に気にする様子はないようで、

「そうなんだ〜」
軽く相槌を打たれた。
「あの。えっと。サッカー部なんですよね？」
サッカー部のユニフォームを着ているしね。まぁ、高野先輩がサッカー部だということはもともと知ってるんだけど。
「あ、俺？　そう。サッカー部。……って、ユニフォーム着てるからすぐわかるよなぁ。じゃんけんで負けてさ、ジュース買いに行かされてたんだ。俺、二年だよ？　フツー、一年が買いに行くと思わない？　うちのクラブ絶対おかしいんだよなぁ」
そんなことを楽しげに話す、先輩。
もっと、話しづらい人かと思ってた。
高野先輩につられて私も少しだけ笑った。
そして、ジュースの最後の一本を袋の中に入れる。
「ありがとな。助かったよ。じゃあ、気を付けて帰れよ」
にっこりとして、先輩は運動場の方に駆けていった。

……それだけのことだった。

「え？　それだけ？」
私の話を聞き終わった時、睦子（むつこ）は意外そうに聞き返してきた。
「それだけ」
答える私。
昼休み。
普段は教室でお昼を過ごすのだが、たまには外で食べようともちかけ、運動場の隅っこの木陰で二人でモグモグお弁当を食べている。
高野先輩と偶然会話を交わした日から、もう一ヶ月近くが過ぎていた。
全く接点などないのだが、たまに見かける先輩のことを目で追っている自分に気付いてしまった。
「依子（よりこ）って、ああいうタイプは好きにならないと思ってたなぁ。な

んか、もっと地味な人を好きになりそうなのに」
親友よ、ごもっともですが、ちょっとひどい。
「私だって、大誤算だよ。でもさ、噂で聞いてたイメージと違ったんだよね。……う～ん。そうじゃないな……。いい人でみんなの人気者、ってところは噂どおりなんだけど、もっと気さくな感じというか、なんというか……結構、普通の人？」
うまく説明できないんだけどね。
「ふ～ん。なんとなく言いたいことわかるような気がするよ」
睦子ならわかってくれる気がしたんだ。
「うん。ありがとう。なんか、睦子に話したらスッキリした」
この時点で、私には先輩に告白するとかそんな考えは一切なかった。常識で考えて距離が遠すぎる。
しかし、睦子からは熱い反応が返ってきた。
「は？　なにスッキリしてんの？　まだ何にも始まってないのに。もちろん高野先輩に想いを伝えるんでしょ？」
親友よ、なに無茶言ってんの？
「そ……そんなことできるわけないでしょ！　相手は私のことなんて多分覚えてないだろし。知らない子から告白なんてされても迷惑なだけだよ」
「いいのよ、迷惑でも。だって、ホントに好きなら私に話したくらいでスッキリするわけないでしょ。相手がどう思うか、じゃなくて自分のために告白しなさい」
「いやいや。相手がどう思うかってところは告白の最重要ポイントでしょ！？」
「まぁ、それも一理あるけど。でもさ、せっかく好きになったんだからやれることはやった、って思えるような恋をしてほしいじゃない！」
あれ？　こんなに熱い人だったかなぁ？
こんな感じで熱弁を振るう睦子に、最初は全く聞き入れる気のなかった私だったが、少しずつちゃんと考えるようになっていく。

なんでも、無理だと思ったら最初からチャレンジしてみようともしなかった。ずっとそうやってやり過ごしてきた。別にそれが悪いことだと思わないけど、良いことだとも思っていない。いつも中途半端だ。

そのうち、もし先輩に彼女がいなければ告白をするという話になり、彼女はいないようだ、と睦子がどっからか調べてきてくれた。

彼女がいないわけがない、とどこかで思っていたのでそれを聞いてはじめて覚悟が決まった。……なんていうと大袈裟だけど。

高野先輩が、親の仕事の都合で水曜日だけは弟の世話のために少しだけクラブを早く切り上げて帰ることも睦子と一緒に調べたりしてそれなりに楽しかった。

私の悪いところで、そんな前準備をしているだけでなんか頑張っている気になってしまったが、それを見透かしたかのように睦子に「とにかく途中であきらめないことね！」などと言われながら今日に至る。

渡り廊下の向こう側に高野先輩の姿が見えた。

よかった。一人のようだ。

やっぱりこのまま何もなかったことにして帰っちゃおうかな、という気持ちを振り払うように、私は足を踏み出した。

先輩も私の方に気付いたようだ。

「あの。ちょっとすみません。あの。今、時間もらってもいいですか？」

もしダメと言われたらものすごく困るんだけど。

「ん？　なに？」

高野先輩は私の真正面で足を止めてくれた。

真正面から先輩の顔を見るのはあの時以来だ。

「あ、はい。あの。私、二年の羽田依子っていいます。前に一度、

先輩と話したことがあるんですけど、覚えてますか？」
「いや。覚えてないなぁ」
返事はやっ！
覚えてないのね。
そりゃそうだ。だって結構前のことだし。
その間に学年だってあがったし。
ここは予想通りの返事だ。断じて「俺も君の事を覚えてたよ」的な展開を望んでいたわけではない。ちっともそんなことは思っていない。うぅっ……。
首をかしげて申し訳なさそうに私の方を見つめる高野先輩に、改めて口を開く。
「えっと。急にすみません。あの。覚えてくれてなくていいんです。でも私、前に下駄箱のとこで先輩と話したことがあって、その……。その時から、ずっと先輩のことが好きでした。よかったら、付き合ってください」
よしっ！　言い切った。
なんか、正直それで満足だ。
付き合ってもらえるわけないし。逆に、会話したことを覚えてもいない私の告白にＯＫを出されたらなんか幻滅だし。いやでもそれはそれでうれしいかもしれないような……。
あ……。最後まであきらめないでいようって決めたんだっけ？
高野先輩が、ちょっと困ったような顔をしているのが目に入った。
私は、先輩の答えを聞く前にこの場を走り去りたい衝動を必死でおさえる。
「ごめんね。うれしいんだけど、羽田さんのことよく知らないし」
ですよねー。
「だから、急に付き合うとかはできないけど」
ですよねー。
「月並みかもしれないけど、友達から、とかじゃだめかな」
ですよね……って、えぇ！？

どんだけいい人なんですか！？
なんか、私すごく気を使われてるよね！？
私の頭の中では、「気を使ってくれなくても大丈夫です。告白できただけで満足なんで」というセリフが瞬時に組み立てられたが、言うのを思いとどまった。
振られることはもちろんショックだが、それを言って、この場を去って、明日からは残念振られちゃったよって先輩のことを思い出にしてしまえばきっと楽だろう。
ここで楽な方を選んじゃいけない気がした。
せっかくのチャンス。
「あの。先輩がそれでいいなら、お願いします！」
はじめて、高野先輩の目をまともに見て、言った。
やさしい笑顔。
無謀でも、もうちょっとだけ、あきらめずに頑張ってみようと、決めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5304e/

ここからはじまる

2010年10月8日15時14分発行